

ノラン・ノアと別れた後、ネックとリアムは路地を西へと行った。

市場の通りと比べると多少ひっそりしているが、それでも西通りには多くの往来があった。建物と建物の間にはカラフルな旗が飾り付けられ、どこからか陽気な楽器の音が聞こえてくる。通りには町民や商人だけでなく、観光客ふうの人の姿もあった。

「宿に泊まるのなんて久しぶりだね」

「そうだな、四、五年ぶりくらいか」

「アリーベにお家建ててから、旅とかしてなかったもんね」

通りを歩きながら、リアムが楽しげに言う。

「今日って、シェンティアのお祝いのお祭りだったんだね」

「分館でもこんな盛大にやるんだな」

ネックも街の飾りを見ながら感心していた。

楽器の音が遠ざかると「おかあさん」と女の子の悲鳴のような泣き声が聞こえてきた。

「迷子かな、大丈夫？」

リアムが女の子に駆け寄りしゃがんで声をかけた。

名前を聞こうとしたが、女の子は泣きじゃくり、聞き取れる状況ではなかった。

女の子は片手にうさぎのぬいぐるみを抱きしめている。

そういえば、何組かぬいぐるみを持っている子供がいたな、とネックは通りに目をやった。

二人は女の子がひとしきり泣き終わるのを待って、

「うさぎさん、お母さんに買ってもらった？」

優しい声でネックが聞くと女の子は、

「うん」

ぐじゅぐじゅと鼻をすすりながら、持っているぬいぐるみを強く抱きしめた。

少し落ち着いてきたのを見てネックがリアムに目配せをすると、

「こっち行ってみよっか」

とリアムが女の子の手を引いて通りに出た。

すると、慌てて母親らしき女性がやってきた。

女の子は「お母さん！」と元気よく母親に抱きついた。

「良かったね」

リアムが安心して笑う。

母親が二人に向かってお辞儀をすると、女の子の手を引いて去っていった。

リアムは親子に手を振りながら、「ノアには家族っているのかな」

と呟いた。

同じく親子に手を振っていたネックがリアムを見た。

リアムの瞳がほんの少し揺らいでいた。

「ノアのこと、何かひとつでも分かるといいんだけど……」

親子の影が消えて、ネックは手を下ろすと『シェンティア分館』方面へ顔を向けた。

「ロインのことだから、何か解明してくれるだろ」

ネックがへへっと笑うので、リアムもつられて口角が上がっていた。

ふたりは賑やかな通りから、ひっそりした細路地へ歩みを進める。

ほどなくして、ふたりは吊り看板を出している、三階建ての宿屋を見つけた。